



FLINGPOSSE
+ ALL DIVISIONS
NOVEL



CANDY GRADIATORS

by Roua

続きはPixivにて▶

「キャンディ・グラディエーターズ シリーズ」
<https://www.pixiv.net/novel/series/1061504>

キャンディ・グラディエーターズ
キャンディ・グラディエーターズ 2
キャンディ・グラディエーターズ 3 (前編)
キャンディ・グラディエーターズ 3 (後編) 完結



個人によるファンアートです。無断転載・転売を禁止します。
Do not copy or upload the contents without permissions.

僕らはホッセ

0. ホッピングシャワー

ヨコハマ・ディビジョンにある港の倉庫街で草木も眠るような夜更けにちよつとしたボヤ騒ぎが起きたとき、シブヤ・ディビジョンでは餡村乱数が机の上の白い紙の前にウンウンと唸っていた。視界にうっとおしいピンクの髪はバンダナで乱雑にまとめ上げて、コツコツとよく尖った鉛筆でリズムを取る。椅子の上で胡座をかきながらしばらくぐるぐると回っていると途端にひらめくものがあつた。インスピレーション。ウキウキと線を走らせて、思うがままに色をぶちまけてみる。目が眩むようなその光の暴力を、削り取って形作ってデザインする。いいねいいね！頭の中で加速度的にいいねの数が増えていく。

乱数はこういう時、つまり自分がノリにノッているとき、きつと世界のどこかでは誰かが不幸のどん底に落ちているのだと思つている。そう考えるとますます楽しくなってくるというものだ。ますます、僕らが世界を面白くしてやらねばと思うのだ。人生は幸せのゼロサム・ゲームだと思ひこんでいるつまらない人間も



ドキ共に、脳みそが焼き切れる程の色を見せてやらねばと。平凡な毎日をベツトして、ハッピーエンドにねじ込むことを教えてやらねばと思うのだった。

1. ポッセ・エコシステム

「じゃあーん見てみてえ！僕お手製のポッセTシャツだよお！」

乱数が回転椅子でぐるりと器用に回りながらお披露目したその真ん中には、心底人を小馬鹿にしたような目つきのご機嫌なキャンディー野郎が鎮座ましましていた。飛び跳ねるポップな色とデザインの暴力に目が少し慣れると、申し訳な程度にFling Posseのロゴが入っているのがわかった。常備されているお菓子ゴの包みに手を伸ばしていた有栖川帝統が思わず舌を突き出してうんざりと感想を述べる。

「うへえ；また無駄に派手なもんづくりやがって…」
乱数は手にしたTシャツをもう一度裏表眺めて、満足げに頷いた。

「それ！最近のシルクスクリーンって値段の割にめちゃくちゃ発色いいよねっ！もうこれ普通に販売できるレベルだよね？てか売っちゃう？でも僕が売らんだったら流石にもう少しこだわりがあったほうがいいかな。あくでもでもこの手作り感がいいっつ

て実は服のこともデザインのこともまっつっつたくわかってないようなおねーさんたちは喜ぶかもしれないし〜」

ぴよんと飛び跳ねて床に降りてきた乱数がご機嫌にペラペラととりとめのない言葉を雨あられのように撒き散らしながら、事務所のソファーに思い思いに腰を落ち着けているポッセの元に歩み寄ってくる。乱数の演説に一ミリたりとも耳を貸す気がなさそうな夢野幻太郎なんぞは出された紅茶缶の成分表をいかにもといった体で「へえ」とか「ほお」とか言いながら読んでいた始末だ。帝統は仕方なく深く沈み込んだソファーから乱数に声をかける。ポッセの生態系は複雑かつ繊細なコンピネーションの上に成り立っているのである。

「お前、お姉さんのこと好きなのか嫌いなのか？」

「僕に嫌いな人間なんていないって言ったよね？とりあえず帝統着てみて！インスタにあげてから考えよ！」

帝統のサイズはこれね！と、乱数が手に持った中から一枚、帝統にTシャツを押し付けてくる。施しは受ける主義だ。帝統はへえへえとため息をつきつつそれを受け取り、面倒なので黒のカットソーの上から乱雑

にそれを被る。

「帝統、横着せず万歳なさい。なにせ小生はこの時代錯誤な服ですからおいそれと着れませんのでね。代わりに二枚ほど着ておいてください」

「いやばんざーいって馬鹿にしてんのか!」

紅茶缶から目を離さず語りかけてくる幻太郎に向かって帝統が吠えていると、乱数が満面の笑みで幻太郎にじり寄っていくのが見えた。

「うんうん、一人でお着替えできて帝統はお利口さんっ。幻太郎は僕が手伝ってあげるから安心してね!服脱がせるの、チョー得意だからっ」

とつきに飛びかかれてあっけなくソファに押し倒された幻太郎が抵抗する間もなく、シユルリと衣擦れの音がする。

「いえ小生は結構で、は?待て、おい、ほんつとに得意なんですわね…えっ、ボタンってそんな速く外れる…?」

サイズびつたりの上シャツの裾をひっぱりつつ帝統が目をやってみると、ほとんど素でつぶやいている幻太郎に乗りながら一瞬にして袴の紐を緩め前を開けシャツのボタンを外している乱数が見えた。確かに

速い。職業病かそれとも趣味のほうか。しかし傍から見ているら完全にアレな光景である。

「何やってんだお前ら…」

なんとなく見てはいけないもののような気がして、だからいつもであれば一顧だにしないようなテレビのつまらない旅番組の場面が急に切り替わって慌ただしいスタジオの様子が映し出されたとき、帝統は思わずそちらに目をやらざるを得なかった。レポーターがチラと視線を彷徨させた後、真面目な表情でカメラに向かって話し始める。

「ここで緊急記者会見の様子をお伝えします。有楽社の有栖川彩代表取締役社長による特別緊急記者会見が先程中王区のホテルにて開始されました」

「有楽社はYODグループの中心的存在とも言える老舗メーカーで、その経済的…え?社としてはなく有栖川家の…息子さんを探している?誘拐事件ってことですか?違う?」

「あ、現地からの生中継でおつなぎします!」

どんどんと流れてくる情報に帝統の動作が停止しているのを見て、圧倒的実力差の脱がせ合いレースをし

ていた二人も首を捻ってテレビに意識を向けた。

画面にはきっちりとしたスーツに身を包んだ眼光の鋭い美しい女社長が、淡々と集まった記者陣に対して挨拶を述べていた。連絡のつかない息子を探していること、今から息子へメッセージがあるので少々お見苦しいが許してほしいこと、そして。

『帝統！このできの悪いばんくら息子が！親不孝者！二度と有栖川家の敷居はまたがせまいと叩き出しましたが、事情が変わりましたので少しでも反省しているのであれば今すぐ一秒でも早く戻ってきなさい！』

世の母親が切れると大体こんな感じだ。バリバリのキャリアアウーマン然とした女性が一転して母親の表情になるものだから、思わず乱数がママこわーいと冗談めかしてつぶやく。そのつぶやきは拾われることなく、ちらりと二人の視線が引き続き完全硬直状態の帝統に向けられた。

四つの瞳に見つめられて、ようやく覚醒した帝統が焦ったように口を開いた。

「いや…そのこれは違うくて…」

『ーとは言ってもお前のような生粋の阿呆が反省をし

ているとはとても思えませんので、KとJを迎えにやりました。チームメンバーのお宅に転がり込んでいるのは知っていますよ。今更無駄な抵抗はしないように。博打打ちなら腹を括りなさい。チェックメイトです』

「ピンポンピンポン」

「はーい♡」

「待てよらむだあああああ！」

間髪入れぬ空恐ろしいチャイムの音に反応した乱数の肩と腕を乱暴に掴むと、そのままの勢いで元いたソファにほっぴり投げる。さっと避けて乱数のスペースを確保した幻太郎はテレビを眺めながら服の乱れを直していた。

「いやお客さん来たみたいなんだけど？」

「今この流れで!?出るな！怖すぎんだろ確実にあいつらじゃねーか！いややばいってここ！裏口とかなんか窓から逃げられたり」

焦る帝統にまあ落ち着きなさいよ、とのんびりした声をかける嘘つき作家は、そのままはて、と首をかしながら。

「つまり貴方、ご自身のことを現在四大財閥の一つで

あるYOUグループの筆頭株主かつ有楽社創業一族である有栖川家のできの悪いぼんくら息子目下捜索中である有栖川帝統君御本人だと認めるわけですね」

「うえっ、いやっ、それは……」

珍しく嘘一つなく否定しようのない事実の指摘にポーカーフェイスなんでものは完全に吹き飛んだ帝統がダラダラと冷や汗を流しながら両手を意味もなく彷徨わせる。その様子を見た乱数はふうん、と言いながら小さな身体でソファにふんぞり返って、すっかり冷めた真っ赤な紅茶を一口飲み干した。

「だいすう。大丈夫だよ」

鉄の扉一枚先には追手が迫っている状況で、切迫感とはちぐはぐな所作と笑顔を向けられて、帝統も一瞬大丈夫なのかな、と思ってしまう。

「僕たち知ってるから」

「えっ」

幻太郎といえば今ようやく首元のボタンを掛け終わろうかというところだった。もしかするとボタンが苦手なのかもしれない。乱数の言葉がつるとつると耳元を流れていく。

「いや、だから僕たち知ってるから、そのくらい。てゆーか本気で隠す気あったの？ないよね？せめて偽名使うくらいするでしょ、本気だったら。そんなけつたいな名前で二十歳そこそこの子供がギャンブラーだなんて冗談みたいな人生が現実にあるわけないじゃん。ちよっと調べたら一発だよ」

「人の名前と人生を口ごんじゃねえよ……」

なんとか声を絞り出したものの未だによく理解できない。いや、しかし乱数はこういう奴である。そもそも最初に二人をチームに引き入れたときもよくわからない情報をチラつかせてこちらの逃げ道を塞いできたのだ。まるでお前らのことはすべて尻の毛までお見通しだとも言わんばかりに。帝統が助けを求めるように幻太郎に視線を向ける。

「げ、げんたろう……」

「うーん。乱数のこと調べたついでだったんですけど……思ったよりあっさり出てきたので」

乱数に比べればまだ多少は罪悪感を持っているように見える幻太郎は目をそらしながら答える。どういう調べ方をしたら多少いいところの生まれとは言え基本

的には一般人、かつつい最近成人したばかりである帝統の情報が思ったよりあっさり出てくるのか調べたことのない帝統本人にはわからなかった。

「そ「坊っちゃん!」」

「マジかよ僕の事務所の玄関どうしてくれんの!」

帝統が何かを言おうとする前に、廊下の向こうから金属チェーンがその役目を果たさなくなったのであろう音がした。扉が開かれ、外の空気が流れ込んできた。乱数がソファからびよんとキレ気味に立ち上がって、帝統の後ろに向かって剣呑な目線を向ける。背後に近づいてくる懐かしい二人の男の存在感、と聞こえてくる声。

「大変失礼しました飴村様。責任をもって後ほど弁償させていただきますので」

「えー、あーうん。弁償ね、まあそっか。ちょうどオートロックにしたいって思ってたんだけどどうそういうこともできる?」

「後ほどご連絡差し上げます」

やったありがと!とコロッと態度を変えた乱数に盛大なため息が漏れた。

「そーーーゆーーー奴だよお前は!」

乱数は目を細めて帝統に向き直ると、まさに小悪魔、いや悪魔もかくやと言わんばかりの笑顔で答えた。

「え?僕がどういう奴だって?帝統坊っちゃん♡」

幻太郎がこちらに背を向けてブルブル震えながらソファの片側に転がっているのが視界の端に見える。同じようにブルブル震える拳を握りしめて、帝統は低く唸ることしかできなかった。



2. ハイビスカスティー

あれよあれよと機嫌を直した乱数に押し切られる形で、信頼厚い有栖川家の用心棒二人にはあまりに似合わない赤い色のフレーパーティーが振る舞われた。もちろん礼儀的な意味以上口をつける様子はなく、相変わらずこいつら何が楽しくて生きてるんだ？と代わりに帝統がズズズッと不機嫌な音を立てて鼻にツンと来る香りの紅茶を飲む。

「それで、あまりに出来ない馬鹿息子に愛想をつかして今の今までは見逃してただけど、この度のつびきならない状況になったから引き取りたいと」

事務所の主である乱数がちよこんとソファに腰掛け、ふむふむと頷いて見せる。

「それはそれは…御母堂の心労が忍ばれますねえ」

「どういう意味だよ！」

この色相環もエントロピーも天元を突破したような非現実的な乱数の事務所で、きちんと座り込んでいる黒スーツの男たちは乱数と幻太郎にそれぞれ控えめに頷いた。

「ちなみですが、その『のつびきならない事情』というのは？差し支えなければお伺いさせていただきます？」

「それは…」

幻太郎は眉を下げ首を傾け、なんならちよつと潤んだ瞳で訴える。

「それでも帝統は現在我々の方で保護しております故…時折訪れる老人ホームの皆様にも大変可愛がっていただいているのです。突然いなくなったら悲しみのあまり心臓発作を起こしてぼっくり逝ってしまいそうな孤独な入居者も…」

「人を拾ってきた猫みたいな言い方するんじゃない！いつもの癖で頭をはたくといつものように「あた」と声が聞こえた。

「まあおよそ嘘ですけど、保護しているのは事実です。我々にも事情を聞くくらい権利はあるのでは？」

さっきの弱々しい態度はすっかり消し飛んだふてぶてしさに、思わず帝統も唸る。

「保護…いや確かに金とか宿とか飯とか恵んでもらって…そ、それより！そうだ！のつびきならない事情つ

てなんだよ！しょーもないことだったら俺は戻らねーからな！」

いかつい黒スーツの男二人が打ち合わせしたかのよ
うな動作でお互いに顔を見合わせた。

「…ご友人の前でお話しても？」

「ったりまえだろ！俺たちに…いや俺たちはポッセ
なんだよ！」

秘密はなしだ、なんていうとそれは恐らく嘘になる。
嘘をつくのは帝統の仕事ではない。

帝統とその横の二人の視線を受けて、男が咳払いの
後それでは、と静かに声を発した。

「西条グループの瑠璃子お嬢様が、ご婚約を検討して
もよいと」

「婚約う!？」

「このご時世でもやはりお家によってはそういうこと
もあるんですねえ」

「帝統すごいじゃん！」

西条も瑠璃子もよく聞き覚えがある。次の瞬間忌々
しい少年時の記憶と感触が蘇り、帝統は背筋がゾクゾ
クツと寒くなった。

「はああああ!?瑠璃子って、あの生意気瑠璃子!？」

「そうです。あの、元許嫁の瑠璃子様です」

「許嫁〜!!」

帝統が更に何かを言う前に見事に息の合ったツッコ
ミが炸裂した。聞こえてくる乱数の低い爆笑が本気度
を伺わせる。

「婚約に許嫁とかワードがベタすぎる〜！嘘でしょ今
H歴なんですけど!?げんたろうせんせえ〜！この使い
古された陳腐なご都合展開どう思います〜？」

「乱数、使い古されたベタで陳腐なご都合展開とい
うのはそれだけ人々のよっきゅんっふ、欲求に即してう
ふふふふふ」

逆に声が高い方にひっくり返っている幻太郎につら
れて更に乱数が笑い転げた。何だこいつら。箸が転ん
でもおかしい二十四歳児か。帝統は近くにあった下派
手なスパンコールでガラギラのクッションをひつつか
むと、全力で二人の顔面に叩きつけた。

「笑ってる場合じゃねえ！ふっざけんな！誰があんな
クソ女と今更、こ、婚約なんかできるか！」

「坊っちゃん、お言葉を。瑠璃子様も今はすっかり大

人びて慎ましやかでふくよかな……」

「お前がお言葉だろーいやそんな情報どーでもいい！やだ！俺はあんなどころ戻らねーし婚約もしねえ！大体まだ俺二十歳だぞ！大学も卒業してねえっつの！」

「えっ、帝統大学生だったの!?!」

「逆になんでそこは調べてねえんだよ!?!」

心底びっくりしましたと言わんばかりの間抜けな顔をした二人を振り返る。何故だ。何なら増減の激しい財布には学生証が入れっぱになっているし、財布や身分証を抜いていないということはコイツら一体どうやって人の素性を探っているんだ。逆に怖い。

「愛しいポッセのことをそんな根掘り葉掘り調べたりするわけないじゃん、ねえ幻太郎」

「誰にも知られたくない過去の一つや二つあるものですしね」

「言ってることとやってることろー!」

思わず地団駄を踏みたくなる。毎度おちよくられている感が否めないのは年下だからなのか。

「いや、でも真面目な話あなた学費なんて最初に掛ける金に乗せるタイプでしょう」

幻太郎の正論にはスーッと反論があった。

「学費の口座は我々が管理しておりますので手を出せません。坊っちゃんそうは言っても大学ほとんど行かれてないでしょう。成績も散々だったじゃないですか」

「試験受けるだけ偉いだろーが!?!むしろ褒めるよ!」

帝統わがまま坊っちゃんくと乱数が笑っている。なんぞ反論しようとしたが、突然幻太郎が左腕にひしつと抱きついてきたので言葉を飲み込んだ。らしくなくふるふると震えるつむじを見下ろして何事かと目を見開くと。

「帝統：だいすう：いつもからかって妾が悪うござんした：後生です絶対に笑わないから何学部か教えてたも……」

「笑う気満々じゃねーか！絶対言わねー!」

また取って付けたような殊勝な態度に騙された。思いつき振り払うと涙目でケラケラ笑いながら作家が再びソファに転がった。お得意の嘘すら吐く余裕がないらしい。乱数が転がってきた幻太郎を今度は反対方向に押し戻しながら「イカサマ学部のサイコロ学科とかかな!?!」とかいう平時で言われるとおそらくクソほ

どつまらないであろう冗談で二人して過呼吸に陥っている。ソファがギィギィと悲しい音を立てた。

「まあ一旦大学の話は目を瞑りましょう。とにかく一緒に帰りますよ」

「昔から思ってたけどお前らの表情筋鉄壁かよ？この状況でよく話進められるな？」

「我々の仕事ですから」

鉄面皮のくせにちよつと誇らしげなところが逆に癪である。

「これだからリーマンはよお……とにかく嫌だ！帰ったところで瑠璃子と婚約なんかしねえしあまつさえ結婚なんて絶対しねえ！つーわけで婚約話にも意味がない！つーわけで俺は帰らない！どうだ！」

大分なりふり構わずわがままをやっている自覚はあるがこの際背に腹は代えられない。しかも圧倒的に不利なこの状況に加えて息も絶え絶えのチームメイトはソファから起き上がるなり「ふー、頭悪いんですかね」「え？帝統はアホの子だよ？」などと暴言を吐くのだからたまったものではない。四面楚歌、絶体絶命、一寸先は真つ暗闇だ。

「お前らな！」

「結婚できないというのはなぜですか」

「いやなんでって！そりゃあなんでって……」

こんな素朴で素直で愚直な人間と久しく会話していなかったせいで、全く会話のテンポがつかめずに帝統が焦る。

「なんでって、なんでもだろ？えっ、なんかノリでわかんないのかこういうの？」

「まさか、既に心にお決めになった人が……？」

ハツとしたように言われてこちらもハツとした。

「そ、そうだ！俺にはえーっと」

「坊っちゃんいつぞやの賽の女神とやらではお話になりませんよ」

読まれている。伊達に昔から困らせていたわけではない。

「ぐぬぬぬ……いや、違う、そうだ！こいつ！」

「は？」

帝統がとっさに幻太郎の腕を掴んで引き上げた。

「俺と幻太郎は……えっとあれ……俺達は、前世で結ばれなかった武士と姫だから！」

「…ねえそこのお兄さんたち」

どう見ても同じく笑い死にかけていた感は否めない乱数が、なんとか体制を立て直してこちらに歩み寄ってきた。小さな身体に似つかわしくない威圧感が足元から立ち上っている。

「飴村様、」

「あのさあ、そんな風に帝統連れて行かれると、それってつまりFling Pose解散ってことになっちゃうんだけど？ねえどう責任取ってくれんの？これでも僕ら、一応シブヤ代表なんですけど」

「乱数：」

そう言いつつ、いつの間手にしていたのか右手にヒプノシスマイクをチラつかせながら乱数が帝統たちの前に立つ。常ならソーダに沈めたビー玉のような目が今回ばかりは笑ってない。乱数にとっては見上げるほどの大男がたじろいでいるのが雰囲気かわかる。しかしこちらにも長年のプロである。それとても忠実な。何なら乱数や幻太郎よりよほど信頼のおける男たちであることは帝統が一番良く知っていた。こいつらは引かない。そもそも命令を違えて引くという選択肢は彼

らに存在しない。

「それは…大変申し訳ないと思って」

「あと…僕たち、結構な額を帝統に貸してるんですけど」

「乱数」

ほれみるこの信頼のおけなさ。今そういう話をする場ではないことくらいいまでもな社会経験のない帝統でもわかる。後ろでため息が聞こえたかと思えば、「それについては後ほどご請求いただければお支払いをいたします」なんてビジネスライクな声音が落ちてきた。

「そっかあくなら安心だね！あ、じゃあじゃあ、お兄さんの名刺頂戴？ここに請求書送ればいいんだよね？てかお兄さん筋肉すごくない？スーツの上からそれってどんだけゴリマツチョ？」

「では小生はこちらの細マツチョのお兄さんからお名刺を頂戴しましょうかね」

「お前らあく…！！！！！！」

否、こいつらは最初からそういう奴らだった。だがしかしポッセの危機である。もう少し何かないものか。割としょっちゅう危機に陥っては「ポッセの危機」カー

ドを無駄遣いしている帝統がジタバタ暴れるのを、名刺を差し出し終わったゴリマツチヨが再度引きずっていった。慈悲はない。細マツチヨがお茶の礼を述べている。

「なんでだよ！俺たちポッセだろ！」

「そうだよ僕たち仲良しフリングポッセ。でもだいすう、ポッセである前に帝統は有栖川帝統なんだよね」

名刺を片手でひらひらと振りながら、乱数がニッコリと笑った。あつという間に玄関にたどり着き、見送るかのように両手を広げる。

「自分の人生くらい、自分でケジメつけてから出直してこいやクソガキ」

多少立て付けが悪くなったのか、いびつな音を上げて扉が閉じられた。



3. キャッツアイ

文字通り嵐が過ぎ去った後のような事務所では、テレビのアナウンサーが先週起きたヨコハマの倉庫街での小爆発事件のニュースをどうともないように読み上げていた。よくあるチンピラの小競り合いであったらしい。先程の記者会見なんてももの突飛な存在を洗い流すかのように、交わらない日常の一ギミックとしての夕方のニュースが流れていく。CMの後は天気予報です。チャンネルは惰性でこのまま。

「…で?どうするんですか?」

普段使い慣れない筋肉がきしむ音がする。笑う行為がこれほどの疲労をもたらすことに心中驚きながら幻太郎が問いかけると、玄関扉の様子を確認していた乱数がまるでいつもの顔でつまらなそうに戻ってきた。

「Yeah Fling Posse は解散です今まででありがとーばいばーか」

「ちよっと」

投げやりに手を振りながらソファァーに突っ伏す乱数に幻太郎が訝しげな目を向ける。

「ちよっと何?だって幻太郎だって僕と二人でチームとかマジごめんって感じでしょ?」

「それは死んでも願いたい下げて感じてすけど」

ポッセの生態系は複雑かつ繊細なコンビネーションの上に成り立っていたのだ。

「だよね〜夢野先生の次回作にご期待〜まあ幻太郎の本なんて一冊も読んだことないし今後読む気もないけど」

「おや、いかにも初対面では読んできたフリをしたくせに」

「あんなもんレビューちら見ただけだよばーか」

「荒れてますねえ」

幻太郎がジタバタと足をばたつかせる乱数からとぼつちりのキックを避けるようにローテーブルの前に正座する。冷めて香りの飛んだフレーザーテーブルは驚くほどつまらない味がした。

「そりゃさあ!まあこういう展開も可能性のひとつとしてないわけじゃなかったよあの坊ちゃん!実力も馬鹿加減もちょうどいいし最悪ラップ以外でも使えるとこはあるだろうと思って拾ったんだけど。アングラな

ギャンブラーならともかく、やっぱディビジョンバトルまで目立ちすぎると駄目だったってこと？ 僕的には良い宣伝になったと思うけどな、そりゃ確かに坊ちゃんあんなどうしようもないクソギャンブラーだけど、マイク持たせればそれなりだったでしょ？ 許嫁とかテキトーな話題振ってきちゃってさ、ほんっと笑わせてくれるよね、いやめっちゃ笑ったけど。すごい笑っちゃったけど。ほんと腹筋やべえ。明日が怖い。てかあれもしかして僕ら馬鹿にされてた？ Fling Posseが解散するときは大方、僕と幻太郎の決裂の方だと思ってたんだけどなあ。大体さあ！ 僕有楽社の秘書室のおねーさんと結構仲良しなんだけどさ、こういうの一切聞いてないの、ねえこれマジでどういこと？ 出し抜かれたみたいですよ、ごくごく腹立つんですけど……！」

「ここまで一気にぶちまけた乱数の話を聞いているのか聞いていないのか、もう何度目かもわからない紅茶缶の裏面をなぞっていた幻太郎は軽くため息を吐いた。「終わりました？ たく：本当に底が知れない人ですね君は。まー出し抜かれたんでしようよ。完全に不意

打ちじゃないですか。まさかあんな下世話な記者会見まで打つなんて」

「それ〜！ てゆーかあの記者会見ギャグ以上の意味あった？ 僕の事務所にいること知ってたじゃん！ 誰向けのアピールなの？」

「誰向けと言われましても。YOUグループの名前はヒブノシスマイクの製造でまだ知られているかもしれないが、その中でも有楽社なんて知ってる人は知ってる程度の地味で真面目な堅実一徹の老舗メーカーでしょう？ それに有栖川家つたってお茶の間で突然お家騒動流しても大したワイドショーのネタになりやしないし：単なるアホだったのでは？ 血は争えないでおじやる。そりゃ帝統は多少有名人かも知れないですけど……」

ふと沈黙が落ちる。遠くでサイレンの音が聞こえる。幻太郎がちりと乱数の方に目をやると、考え込む時の癖なのか大きく目を見開きながらパチパチと瞬きを繰り返す。

「：陽動？」

「難しい言葉を知っているんですね乱数」

乱数がガバっと起き上がった。

「そうだとしたら可愛そうな帝統〜！このままじゃきつと首輪どころか手錠のついたベットにされちゃうよ〜」

乱数はうるうる、と口で効果音をつけながら幻太郎に近づき、すつと腰を下ろすとポケットから取り出したキャンディをずいっと口元に近づけてくる。ヤンキー座りにこの威圧感、ナイフを首元に突きつけてるのかと錯覚させられる。

「西条グループの瑠璃子ちゃんだけ？調べてくれるよね？編集部のお友達、そういうの得意でしょ」

「：乱数こそ、有楽社の秘書のお姉さんともう一度連絡をとったほうが良いのでは？まあまだクビにされてなければの話ですけど」

「幻太郎、好き〜！」

包み紙に包まれたままのキャンディーをねじ込まれて、幻太郎の口から変な声が漏れる。

「とこでえ。一緒にプロジェクトを円滑に進めるにあたりソーゴリカイを深めるため一応確認するんだけど、これはチームのため？帝統個人のため？」

「：帝統の身の振り方はともかく、今チームを解散さ

れると困る。俺はまだ目的を果たせていない」

そこで幻太郎が探るような目を向けてきた。乱数はその視線をまっすぐ受け止めてふむ、と考える素振りをする。調べるなつつつてんのに未だにちょこちょこ調べてるっぽいし、ディビジョンバトルよりこつち、なんか面倒になって時々本首漏れちゃってるから余計かもしれないし、何より人のこと言えない自信はあるけど、僕のポッセはみんな腹と背景が暗闇すぎやしないか？それが本当は何色かはさておき。

「それは乱数も同じでは？」

幻太郎に問いかけられて、乱数はフツと息を吐くと自分史上最高に挑発的な態度になるように髪を揺らして肯定した。報酬のキャンディを受け取った幻太郎が横隔膜がほんとに痛い、などと言っているが知ったことか。天気予報によると今夜のシブヤは雨らしい。どうせならスクランブルを渡る全人類を流し込む程の土砂降りになればいいのに、と乱数は思った。

4. BET

本家に無理やり連れ帰られて数日が経過した。飯も宿の心配も不要の代わりに自室にほぼ軟禁状態。この短期間に度々用心棒の二人にギャンブルを挑んでみたが勝っても負けても抜け出すことは叶わなかった。流石に相手構わず暴れる程のガキではないが、見るからに上等な黒い布を当てられ採寸されからは真剣に脱出経路を求めて帝統は家の中をしぼしぼ歩き回った。

「絶対いやだからな！」

「坊っちゃん」

「いやだ！」

「往生際の悪い」

そして本日、宣戦布告の日。この間母親と顔を合わせたことはない。人好きのするおじさんが一度様子を seen 来たが、彼が母親に逆らう術を持っていないのは百も承知だったから特に何も言わず、暇つぶしがてらの世間話に終始した。とは言えど帝統の話す破天荒で非常識極まりないポッセ二人の話は随分と彼には新鮮に響いたらしく、帝統君は面白い友達を持ってるんだ

なあとしみじみ言われたときには悔しながらちよっと目頭が熱くなつた。面白いのはダチだけではない。俺たちが世界を面白くするのだ。多分これから。ムカつくからシンジユクは一番最後にしてやるつもりだ。

「ちよっとくらい協力してもバチはあたりませんよ。お上品にお話をして、お食事をして、調印式に澄ました顔で参列するだけです」

「お前なあゝそれが俺にとつてどれだけ難しいことかわかるか？ピンゾロ！」

「その例えはわかりかねますが小学校の入学式で脱走した坊っちゃんを散々探し周り追いかけて回したのは良い思い出です」

「おう上等じゃねーか！」

久しぶりの広い自室で、相も変わらずスーツをきっちり着こなした二人を立たせ自分はベッドの上からだらしなく胡座をかいて反論する。ギャンブルの場でどうにもいかつい男を前にしても堂々と発破をかけられるのは、さり気なくこいつらのおかげなんだよな多分、と思つたのは内緒である。

「わかりました。お上品にお話のところはなくて構い

ません。黙って食事をして黙って参列しましょう」

「おいこら馬鹿にすんな！だいたいなあ！お前らが黙って座っとけとか立っとけつてときにはたいていロクでもないことが裏で進行してるんだよ！そうだろう！」

男二人が一瞬肩を揺らしたのを帝統は見逃さなかった。

「俺は二度と俺自身がテーブルにつけねえ賭けに乗る気はねえからな！」

「帝統君いる？」

ドアをノックしたのはおじさんだった。声を荒げていた帝統は努めて平静を装い「ずっといるぜ」と拗ねて答えてみせた。

「そうかい、ではちよつと話をしたいかな。お前たち外してくれ」

一族のヒエラルキーは理解しているつもりだ。母親がナンバーワン、この人はナンバーツー。父親は研究職で入婿だ。家のことに口は挟めない。ナンバーツーの仕事は、内政である。

「彼らは君を少々子供扱いしすぎる。もちろん悪気はないんだけど」

マッチョな男二人が従順に退出し、静かになったところでおじさんが椅子を引いて腰を落ち着ける。これは長くなるやつだ。経験上帝統もしっかりと胡座を組み直した。

「いい加減君だつてもう分別のある大人なんだし：半年程前に起きた不良品事故からこつち、グループ内では小さなスキャンダル続きでね、すっかり株価低迷中だよ。姉さんも大変みたいだ。そこに瑠璃子くんが西条グループとの提携話を持ってきてくれた」

よろしい、こう見えても成人男子だからそうした事情は理解してやろう。だが理解することと納得することとはまた別の話である。いつものような威勢は一旦引込めて、帝統がサイコロをいじりながら答える。

「いや、それはなんつーか：おめでてえしありがてえけどよ。でも俺は関係ないだろ。だってあいつは」

「かつて許嫁の関係なのに」

「それとつくの昔に破談になつてるだろ！」

「カエル事件？」

蘇ってくる感触を追い払うように更に胡座の足を組み替えて、帝統が大きく頷く。

「そう。あいつが俺の靴にカエルいれて俺があいつのワンピースにカエルを入れた」

通称有栖川家のカエル事件。思春期の男女が割とガチでお互いに泣き喚いた壮絶な黒歴史である。乱数と幻太郎には絶対知られたくない過去の一つだ。

「あれは確かになかなかね；インパクトはあったけど。ちなみにどうしてあんな事になったの？」

帝統は視線を外しながら答える。

「あー何だったかな。いつも通り瑠璃子と言い合いになったんだよ確か。んでお互いカッとなって；どうせそんな感じだろ？おかげで西条家とは絶縁状態になって、まあそれについては悪かったとは思ってるよ」

しかしおじさんは首を振って静かに言った。

「そんな子供の喧嘩ごときで、当時進んでいたはずの大事な提携話がおじちゃんになるわけがない。まあ決裂の最後の一押しにはなったかも知れないけど。何れにせよ姉貴のことだから時間の問題だったさ。だから、それはいいんだよ」

いつもの困ったような笑顔はひっこめて、おじさんはもう一度いいんだよと許した。帝統はしばらく相手

を見つめ、今回の話が至極真面目な部類、しかもかなり面白くなさそうな部類だと改めて判断してガシガシと頭を掻いた。

「；あんどとき西条と何があったかは知らねえけど、じゃああれか？今回ののは、完全に瑠璃子が主導してるってことか？西条の親父さん、確かに結構年は食ってるけどよ、そこまで老練しちゃいねえだろ」

「もちろん西条さんも思うところはあつて協力してるだろうね。あの人だつてうちのグループと関係性を作れなかったのは痛手だっただろうから。でも、そうだよ。あくまで今回は瑠璃子くんが進めてくれた話であつて、彼女の要請に君との仲直りが含まれているんだ。だからちよつと強引に連れてきてしまつて、こちらこそ悪かつたとは思っている。でもこうでもしないと君、戻ってきてくれないだろう」

ちよつと強引のレベルが違法に片足突っ込んでいる気もしたが、そこについては帝統も黙っていた。

「；瑠璃子が最近、西条グループの子会社を作つたつてのは聞いた。中王区の若いねーちゃん相手の商売だろ？悪いけど俺も、俺のチームもそんなもんに利用さ

れるようなタマじゃねえぞ」

仲直りだなんてそんな可愛らしい口実が奴にあるものか。西条は比較的新しい医療系メーカーだが、元々中王区と関係が深いと専らの噂だ。あれだけ全力の罵詈雑言をぶつけ合って喧嘩別れした相手、しかも敢えて出奔中の帝統をわざわざ名指しで提携の条件に上げてくるなど、ディビジョンバトルくらいしか心当たりがない。

「まあ乱数だったらおねーさん相手に少しはサービスしてくれるかも知れねえけど」

「それは追々また瑠璃子くんと相談してもらえれば良いんだけど。婚約話も含めて」

「しねえ。それだけは絶対になえぞ」
「じゃあそういうことにおこう」

おじさんはちよつと笑いながら頷いた。帝統はまだ腑に落ちないものを感じ、きゅつと眉をひそめた。

「本当にそれだけのために、あんなふざけた記者会見まで打ったのか？一人息子が家出して連絡も取れずフラフラしてる大馬鹿野郎だってバラすようなことして？」
「…あの姉貴も多少は上品になったけれど、基本は目

立ちたがり屋のド派手好きな大博打打ちだからね」

おじさんは大げさに肩をすくめて見せて、それから自分で納得するようにウンウンと頷く。氣と運と自我の強い姉に振り回されながら、長年じつと堅実に生きてきた男はそれでも姉と同じような性質を持つ帝統を昔からよくかわいがってくれた。

「これを機に君が戻って真面目に更生してくれるんじゃないかって賭けさ」

これには帝統がはつと笑い飛ばした。

「あの人はそんな負けがわかっている賭けは絶対しないよ」

話の核心に近づいてきた気がする。賽をしつかりと片手で握りしめてカードを繰る。

「何だよ、何が目的なんだ？」

おじさんはやっぱり困ったように眉を下げ、言った。

「姉さんは君のことが心配なんだ」

「俺は」

そんな当たり前のことを聞きたいわけじゃない。
「君はそんな、危険な橋を渡らなくなつて十分姉さん

の助けになれるんだよ」

「なんのことだ？」

「あのマイク、チームメイトのところに置いてあるの？」

「なあおじさん」

やっぱり来たか、と自分の中の『良い子』を最大限総動員して尋ねる。

「今回のことが終わったら俺、また Fling Posse に戻っていいんだろ？」

「それは駄目だな。彼らとつるむのは、僕もどうかと思う」

思ったよりもきっぱりとした答えが返ってきてしまった。ゆるりとカーテンが目の端で揺れる。そう言えばこの部屋には時計がない。衝動で声を荒らげないよう、右腕をあぐらに乗せ姿勢を低くする。

「なんで？ 乱数が秘書室のねーちゃんと仲良くしてるのが気になる？」

たまたま暇な時に見つけた、それこそ無造作にアツプされていた無数の「お姉さんの写真」の片隅にほんの少しだけ写っていた封筒のロゴ。あまりにも見慣れたものだったから、しかもご丁寧にタグまでついて

いるものだから、ちよいと遡ってしまった。だからどうだというわけではないが、お姉さんは個人ジョーホーとやらについて、無防備すぎやしないかと思う。

「…彼、他にも中王区に随分知り合いがいるみたいだけど」

「あいつはああいう性格だからな」

まさか知っているととは思わなかったのか、おじさんが虚をつかれたような表情を見せた。まずは先制点。ここはまさに慣れ親しんだホームグラウンド。帝統は十二分に落ち着いている。

「彼の前のチームの、解散話は聞いたの？」

「過去にあいつに何があったかは関係ねえよ」

それがポッセだ、と続けるとそうだったね、と返ってきた。

「じゃあ夢野幻太郎が Alice の不良品事件について調べているのは？」

「…、俺を主人公にした小説書きたいんだと」

「君、自分のこと話したの？」

「話さねえけど」

「利用されてると言うことは」

「だったら何だ？」

完全に動揺と困惑の様子を滲ませた瞬間を逃さない。帝統が言い聞かせるように言葉紡いだ。

「今の所困ったことはとくにねえよ。利用されるってなら、こっちだって必要な時に利用すればいいだけの話だろ？あいつらが今まで何やらかして将来どんな問題を起こすのかは知らねえし……できればその場には関わりたくねえな。うん。けど、今間違いないくアイツらがこの世で一番スリルを味あわせてくれる奴らだっていうのはわかるぜ」

おかしなカッコでしようもない嘘ばかりついて人を全力でからかってくる作家だとか、うっとおしく周囲をバタバタ走り回ってはキャンディを差し出してくるピンク頭のデザイナーだとか、そんな頭のイカれた人間、今まで帝統の周りにいなかった。そんな変人と奇人がマイクを握った瞬間に人も人でないモノまで翻弄するようなりリックを放つだなんて、そして自分がそこに肩を並べられるなんて、あんなスリルと刺激がこのクソみたいな世界に存在するだなんて、そんなこと。

「それだけで十分じゃないか？」

そんなこと、今まで誰も教えてくれなかったじゃないか。

おじさんはじっと自分の膝の上で握った手を見つめている。勝負どころだ。帝統はなんてことない、というふうには話を続けた。

「おじさん、賭けないか」

「僕は君や姉さんと違って博打は打たないんだ」

すぐに否定されるがこの場の主導権は既に帝統の手の中にあった。

「乱数と幻太郎が迎えにきたら俺はHing Posseに戻る。期限は一週間だ」

「迎えに来なかったら？」

「母さんに土下座して突然家を飛び出した非礼と最初にくらか拝借した金を全額一晩でスったことを詫びる」

他人に言う割には自分の土下座が軽くなっていつている自覚はあった。そこはあれだ。若気の至りということ許して欲しい。

「そこはせめて働いて返そうね」

「んまあそういうことでもいいかな」

これは確約ではない。あくまで可能性の一つの許諾としての返答である。

「…あれからなんの音沙汰も発表もない。Fling Posseはすでに解散したも同然かってネットでは騒がれているよ」

「そんなつまらない世界で満足できるくらいなら、乱数は端から俺らをチームに誘ったりしねえよ」

おじさんは盛大に溜息をついた。それはもう数十年分か、と言わんばかりの長い溜息だ。こんな甥っ子でゴメンな、と帝統は頭の中で謝った。

「…昔、姉さんがここを出ていこうとした時も僕は止めたんだ。それ以来、僕は賭け事はしないと心に決めた」

サイコロの目一つで飛び出す決意をしたんだという母親の逸話を父親から聞いたことがある。どうやら真実は、弟の出目が悪かったらしい。

「君が負けたら大学にきちんと出席するというのも付け加えてね」

「…いいぜ！ノットた！」

二カッと笑って手を差し出すと、相変わらずちよっと困ったようにおじさんも手を出してきた。ディール成立だ。帝統は久しぶりに気分が高揚した。同時に、音沙汰のないポッセたちは今頃何をしているのかと考えた。

